若者たちの未来と協同組合

「学びの場」と「労働の場」の関係を考える

今日の青年たちにとっての「学び」「働き」「生きる」こと

――人間が成長を実感できる、仕事の場づくりと地域づくりの可能性

報告：平塚　眞樹（法政大学）

協同集会の教育分科会の報告、論議をふまえた上で、今の青年たちにとって、学び・働き・生きること、その中で彼らが内面に何を抱えているか考えてみたいということで、第４回基本研究会（1997年２月22日・東京労働会館）で平塚さんに報告をしていただいた。なお、以下の報告要旨は編集部のまとめである。『協同集会報告集』（協同の発見ＮＯ.58の70頁）の第８分科会報告と併せてお読みいただきたい。

●私もまた「オウム世代」の一員として
：出口のない虚無感からどうやって抜け出すか

大学時代に感じていたことはこんなことだった。

・企業・国家という大きな組織から大学の小さなサークルまで、世の中すべて出来上がっている。自分には入るか入らないかという選択だけで、０から自分たちが作っていく場はもうない。

・建前と本音が違うということを到るところで感じる。がんばれば世の中良くなるということがリアリティを持たない。平和・民主主義を旗印にしている人たちの中にすら、えてして民主主義がないことを実感する。

・世の中を変えていけるという実感が湧かない。たとえば学歴社会を悪いとは誰もが思っていても、自分の力で変えられるとは思えない、自分への無力感。社会を変えることより自分がそこでどう生きるか、という感じで発想が内向的になる。内面に出口のないうつうつとした虚無感を抱いていた。

1950～60年代に青年であった自分の親の世代と比較して、自分たちは夢やロマンが欲しいのにリアリティのあるそれをもてない苦しさがあった。

●子どもや青年たちの、マクロな意識・行動様式の変動

☆「ワンランクアップ競争」に過剰同調しない子ども・青年の増加

・60～70年代にかけて子どもたちは、偏差値競争に駆り立てられてきたが、80年代の半ばから過剰に同調しない子どもたちがでてきた。乗り続けても「なんぼのもん？」と、上り詰めた企業社会が子どもの目からみても魅力的ではなくなっている。もう一方には「どうせ自分には無理」と早々とあきらめて降りてしまうという自分や世間への見限りからの場合もある。

☆「乗らずに」「降りて」どうする？

社会に対する漠然とした不安感・不信感と、その中で生きている自分自身に対する不安感・自信のなさとを２重に抱え込んでいる。

社会が弱くて自分が強ければ自分に従う、社会が強くて自分が弱ければ社会に従うが、両方ともに不安と自信のなさを抱え込むと価値の世界が構築できなくなる。企業社会的価値秩序からは解放されつつあるとも言えるが、その後にまとまりのある世界観をもてない。そんな中にいて青年たちは模索をしている。ごく大づかみに言って３つぐらいのパターンがあるのではないか。

1）「終わりなき日常」を、むかつきながら浮遊する――いわゆる「コギャル」的世界

2）自分の救済を求めて共同体をつくる――オウム的世界

3）開き直ることで根源的な価値を定義し直す――ミクロな実践の模索

これは「社会と自分」という視点からみると、1）は、社会も自分も見限っていて、やりすごす人生観を生き始めている。2）は、大衆社会は見限っているが自己は見限れないエリート的生き方。3）は、ぎりぎりのところで社会も自分も見限らないで踏みとどまっている生き方。

協同集会で黄柳野の須田さんは、これまでの学校で傷ついてきた子どもたちが、それでも強く「学びたい」という要求を持っていても、どこに居場所ややりがいを見いだせるか、暗中模索にあるとの発言されていた。子どもたちが自分を外在的に縛るものから投げ出されて、自分をどこに参加させるか容易に見いだせないでいる中で、他者がどんな形で手を差し出し、誘いをかけたらいいか考

えていかなければと思う。

●状況をきりひらき、抜けていくミクロな実践の模索

教育の世界と、仕事の世界で起きていることには、若干のタイムラグがあるが、社会や制度の「非中核的」部分から、様々な「ミクロな実践」が元気な子ども・青年たちによって生み出されてきている。

☆教育の世界：80年代後半の動き――フリースペースや平和運動、児童館や学童などの学校外地域活動、普通科以外の高校、私立高校の新たなカリキュラムづくり、黄柳野のような新しい学校づくり。市民社会空間の中での新たな教育事業、公でもない私でもない世界が構成されつつある。

☆仕事の世界：90年代ポストバブル期――農業・手労働など第３次産業以外の伝統職種、福祉などの地域型職種、ＮＧＯ・ＮＰＯなどの非営利事業、労協やワー・コレなどの非企業的組織が進路としてのチョイスに入ってきたのはポストバブル期。

☆こうした動向は、いくつかの社会的条件と青年の意識動向とのマッチングの現れと見ることができる。具体的には、

・一定の「豊かさ」の浸透によって、「自前の実践」つまり自分でお金を出し自分が納得できることをしたいし、可能にもなり始めたこと。自前であることにポジティブな価値を見いだす。

・1970年代後半から進行してきた終身雇用の切り

崩しで、労働力の階層化が進行する。中核層がむしろマイナー化。多くのはみ出し層の中にオールタナティブなものが生まれる客観的な基盤が形成される。

・徹底的に周辺化させられた部分が開き直った所からの実践。農業の法人化や新規就農者の研修制度の導入。土建での後継者育成の取り組み。教育困難校と言われるところでの新しい実践。こうしたミクロな実践をどうつなげていくかが逆に社会に課せられている。

●こうしたミクロな実践の場で、子ども・青年たちがつかんでいること、魅力に感じていること

若杉さん：みんな話し合いながら仕事ができる。自分が自分らしくいられる。（協同集会）

城戸さん：自分たちで考えて仕事を「作り上げていく」楽しさ。いろんな年代の人たちと、全員で話し合いながら決めること。（協同集会）

若者たちの座談会：「言いたいことが言える、風通しのよいところ。」「人生とか時間とかを使いこなせる人間に成長しあえる環境をつくっていこうという場の雰囲気の魅力。」「自分のことでも職場のことでも、少しでもこう変わったとか、変わったら楽しいんじゃないかと想像する部分がある楽しさ。」「他人の人生や生き様を聞く中で、自分自身の社会観が育ってきている気がする。」などなど。（協同の発見ＮＯ.50）

☆価値の「取り戻し」の側面

1）社会参加により世界が構築される実感

仕事を通じて自分も社会に関わっているという実感を得る。関わることで社会の広がりが実感でき、小さな窓口から広がる世界がグローバルであることを感じる。出来上がってしまった社会で動きようがないという感覚を持った人間にとって、自分と社会の両方に対する根源的な信頼感の回復となる。

2）協同的関係の中で自己形成・仲間づくり

生産者同士や生産者・消費者が人間として顔が見え、心を通い合わせる関係で生産や流通がなされること。働くことで新しい人と出会い自分の世界が広がる。人と人の連帯をうそっぽく感じていたことが、人と生きる中での自己形成を実感する。こういう中で回復できていく。

☆「取り戻し」「回復」でなく、新しい価値の創出の側面

プロセスの価値――決定された事柄の民主性以前にプロセスが民主的であること。参加民主主義。

小さい世界の価値――支持を広げることと規模を大きくすることとイコールではない。人間的な関わりが保てるサイズで物事が執り行われ続けること。

人の役に立ち平和に生きていく価値――近代社会はどこにでも（民主的といわれる場にも）能力主義原理を埋め込んでいる。それに対して、人と競って自分の利益にこだわるよりも平和的に（みんなが一緒に）生きること。

この新たな価値は、本来的にこうしたミクロな実践の場における「中年」世代と「青年」世代の世代間葛藤としての性格を持っている。

高度経済成長的時代状況で生きてきた人には、左右の立場を問わず見落とされがちだった価値が新たにあぶり出されている。

●メジャーの世界をどう転換していけるか

☆ミクロな実践をメジャーにしていくには

鯉淵学園の中島さんの指摘は「農業志向の若者の増加というミクロな変化がマクロ状況まで転化できてはいない。」という。ミクロな実践とマクロな動向のギャップをどう考えるか。日本や国際秩序のマクロな面での権威主義の中では、非中核的世界はますます周辺化され切り捨てられる方向にある。ミクロな実践が蓄積されつつある時期に、マクロな動向に徹底的に周辺化させられていく状況のジレンマをどう解いていけるか。

☆市民的公共セクターを強化する社会体制づくりと活用していく自己能力の形成

補助金の活用や法人化について積極的に考えていく必要がある。

補助金については、東京土建の作った東京建築

カレッジは大変参考になる。公設の縮小と補助金への流し込みという行政の資金流動の方向の是非もあるが、市民社会空間の事業にどれだけ十分な補助金を出させるかは今後の大事な課題。

☆文化・ライフスタイルの形成

ミクロな実践の場で生成している生き方を、「タテ」と「ヨコ」につなぎながら、「文化」や「ライフスタイル」に構成していくこと。

横につなぐ：斉藤さん――ネグロスを通じて協同組合の本質を学び直す、ネグロスと仙台が自分の中でつながっていること。（協同集会）

縦につなぐ：若杉さん――学童時代のみんなで何かを作る体験、東野高校の校長先生から聞いた話、この経験を経ながらライフスタイルを見つけていったところが事業団だった。（協同集会）

人生を通じて、また地域や国境を越えて、価値の世界をつないでいくことが大切。秋田高教組の渡部さんは、高校生が「大会社に入りたい」志向から「人間らしい暮らしをしたい」「自分が個として扱われるような場がいい」と変化しているが教師は受け止められないでいる。教師自身が「生きる」とはどういうことか職場論議を始めているという。私の長野での調査では、ある地域でUターンないし地元に残る青年が7～8割いる、しかし生徒の地元でいいという発言を大人はなかなか始めはポジティブに捉えられない。

ミクロの積み重ねられつつある価値の世界をもっと豊かにつないでいくために大人自身が“生きる”ことを問い直すことが問われている。

☆労協からやめていく若者

自分を求めて模索している状況で働き始めるから、出たり入ったりは仕方がない部分があるだろう、問題はどこに流れていっているか。「ヨコ」に移動できる環境があればいいと思う。コミュニティー（親密圏）は、心と心がふれあう良さを持つゆえに内と外を分ける要素を持っている。小さい事業体がともすれば、そこに合わない人間への排他性を合わせ持つことを、その事業体にいる人間がどれだけ考え続けられるかが大事だ。

それ以前に、こうしたミクロな実践の場で「生きる力」を子どもの育ちの過程でどれだけ形成していけるかが問われている。

平塚さんから若者・30歳代前半をふくめた年代の人たちの世界を社会的な状況の中に位置づけた報告を聞いて、感想を含めた討論に入った。（参加者の年齢構成は20代、30代、40代前半がそれぞれ1～2割、後の6割は40代後半～70代と推定）

時代状況の中で

若杉さん（センター事業団）の「協同集会で自分の歴史を話した時、みんなそんなに変わらないと感じた。学校をやめた時に自分は少数派になる。あえて少数派に入らないと抜け出せない。そんな中で社会に対する不信感がずーとあって、自分は間違っていないと思うが、わかってもらえないから議論しようとしないでいた。なるべく周りを見ようとしなかった。でもこうして話を聞いていると、自分だけが特別ではないと思う。」という協同集会の感想を含めて、平塚さんの話に、若い層からはぴったりくるという感想が聞かれた。

今の時代状況の中で若者をどう捉えるかということで参加者から「若い世代は共感することはあっても、続けて踏みとどまれる価値観との間に大きなギャップがある。そこにどういう壁があってどういう試みが必要か考えなければと思う。」

「若者たちは、あまりにもやらされ組み込まれているから、担うことをめんどくさい、利用されると“負”の部分と見てしまう。担っていく勇気や、ここに踏みとどまれなかったらその先の世界は見えないということを云うべきだ。」

「金儲けだとか権力だとか、そうではない真っ当な生き方の方が、歴史の中で圧倒的に多くの時代と多くの人が生きてきた。それを淡々と語っていく中で変わっていくのではないか。危ういものに近づかないというプーテン的生き方をむしろ評価したい。」

「今の時代、能動的にやらなければならないこ

とがあるのではないか。しらけているのは子どもだけでなく大人もだ。従来の縦社会では維持できなくなっている今、企業社会を能動的に突き崩して人間主体の社会に変えていかなければ。」

「協同で大切なことは、お互いを認めること、それは違いを認めること。今の学校現場はマイノリティーから逃げられるかどうか、子どもはいつもいつも刃を向けられている。その延長線上に登校拒否やいじめがあることを認識しないと問題は解決しない。」などの発言が続いた。

「50～70年代の民主的な運動の中でできてきた学校にいても、民主的な制度があり、民主的な人がいて、非民主的な論議が行われている。何とか組織を変えたいと思っている。今、協同の思想で教室を運営できないかと思っているが、演劇をつくるクラス集団と運動会に勝つ集団をイメージすると、運動会の集団は勝つために子どもたちの間に緊張関係が生まれる。演劇集団というのは、その子がその子であっていい役を演ずるという別のスタイルがある。文化的な協同体をイメージしていきたい。」ということを受けて、平塚さんは「右肩上がりの社会を生きてきた人に強く刻印されてきたのは、運動会で勝つ集団をどう民主的に運営していくかという価値観ではなかったか。そこのところに対する私たちの感じる違和感が、年代の上の方たちにすごくよくわかるよ、と言われてもわかってもらえているとは思えないでいる。青年世代の側からもっと積極的に世代間葛藤を組織していく責任を感じる。」さらに、「プーにはプーの存在理由があって、“能動的な生き方を”と迫っても無理がある。プー的な生き方をせざるを得ない背景の一つは、そこまでの彼らの「体験」の質の問題。人間の成長を引っぱっていく力は、自分の中で体験化していることだ。一歩踏み出したらうまくいったとか、一歩踏み出したらうまくいかなかったが苦しむ体験を通じて自分が成長したとか、うまくいってもいかなくても一歩踏み出すことは、何か自分の力になるとの体験が身体にあったら、彼らも前に出れらる。もうひとつは、その子の置かれている“階層性”によって自分がどの程度開き直れるかが違ってくる。そういうことも一歩踏み出すことの、たやすさ難しさを左右しているのではないかと思う。」とコメントされた。

自分がどんなスタンスを持っていたにしろ、それぞれの時代の価値観を背負いながら生きてきている。それを異世代がどう見ているか、特に団塊の世代以上の年齢層にとっては、平塚さんの世代論にかなり刺激を受けたと思われる。

ミクロな実践に対して

ミクロとマクロの動向のギャップ、ミクロの実践をメジャーにしていく、ということに関しても多くの論議をよんだ。「ミクロな現象はあちこちで起きていて、確実に学生の感性に通じやすくなっている。あまりマクロだとかメジャーにしようと考えなくとも自分の手の届くところで持続していけばいいと楽観的に考えている。ミクロの世界とマクロの世界が基本的に直結している。いろいろなものを支える情報のインフラがあるから、20年、30年のスパンで考えれば心配ない。」

「ミクロからマクロへと移行するよりも、もっとミクロにこだわっていいのではないか。今それを受け入れる土壌ができていると思う。ミクロとマクロのギャップを埋めることを性急に考えると、80～90年代の世界の協同組合が大規模志向に走った例もある。ミクロの視点からマクロを見るところにこだわってもいいのではないか。」という意見が出された。

平塚さんは「ミクロを巨大にしたら無意味になる。しかし、一方でミクロの世界の安定性が気になる。経営的に困難になれば新たに入っていく人の不安感になる。持続可能性を確保するためのミクロの世界の安定化が課題だ。また、ミクロな現場がマクロな世界に巻き込まれている現状がある。日本経済のマクロな動きの中で製造業が受けている打撃や、農業など国際競争にさらされている問題からみても、巨大になる必要はないが、マクロな動向に食い込める実践でないとまずい。」とミクロの実践の価値認識に差異はないが、ミクロとマクロの関係において認識の違いはまだまだ

議論したりないと感じた。

協同組合教育

協同組合教育について堀越さん（山梨学院大学）から「既存組織での協同組合教育は、企業内教育のプラスアルファーという位置づけでしかない。協同組合教育も、従来の学校教育がもっている押しつけ・受け身・資格取得という教育と同じようになっていないか。協同組合の中に相互自助・自立協同という価値理念があるが、その観点が学習・教育の中でつらぬかれるかどうかが大事なポイントになると思う。『協同の発見』（本誌12頁）に書いている。協同組合の組織構造・協同組合がめざしている事業やしくみの中から、教育も大きく違う何かがでてくる可能性があると思う。」との発言をいただき、センター事業団の菊地さん・古村さんから今の労協の中での協同組合教育について語ってもらった。

「演劇と運動会のクラスでいえば、労協は運動会の集団といえる、事業をやっていかなければならないからだ。一定話し合っても、どこかで判断して見切って進めざるをえないこともある。しかし、自分たちが食べていくことを引きずりながら、話し合ってやろうということを貫いていくやり方に普通の企業とは違う文化があると思う。」

「労協には35歳以下の事務局員が130人ほどいるが、そこがどう育つかは協同組合がどう保てるかの岐路のような気がする。社会と自分をどう整理していくかを教育の問題として考えること。もうひとつは協同するということはどういうことかを追い求めること。つぶそうとするものと闘わなくてはならないが、若者に当てはめると“社会と自分”“闘うことと協同する”ことがつながらない。そこをつなぐ作業が教育の側面としてあるのかと思っている。」ということで、協同組合教育を次への課題として研究会を閉じた。

幅広い世代が、しかも様々な職業の人間が横並びになって論議ができる機会はありそうでいて、そう多くはない。世代の価値観なり認識の違いを意識したところから、はじめて何を伝えるか・どう伝えるかということで、“教育”が語られていくのではないかと感じた。（まとめ：佐藤弘子）

若者たちが希望をもって働き続けられる職場と社会

――新規参入農業青年の場合――

中島　紀一（茨城県／農業・生活専門学校鯉淵学園）

仙台での全国協同集会に参加して、さまざまな分野で、志ある若者たちが新しい仕事を求め、新しい職場の開拓と創造に取り組んでいる様子を知り感銘を受けた。

歴史を振り返れば、若者たちの仕事への就き方にはいくつかの変遷があった。まず、家業を継ぐことがいちばん普通の就業形態という時代があった。家業を継ぐ条件のない若者の場合は手に職をつけるという道を選んだ。女性の場合には、嫁出を前提としてとりあえず奉公にでることが多かった。次の時代になると男女を問わず企業への就職が普通の就業パターンとなる。仕事の内容は、職工、女工、労働者というイメージからサラリーマン、ＯＬという言葉のイメージへと変化し、日本労働社会の基本的枠組みは企業社会となった。そして現代、若者たちのかなりの部分で、企業社会